

## 祭りと女性

東 資子

### ① シャギリと女性

#### ①ー シャギリへの女子参加の経緯

#### (1) シャギリの練習参加へ

昭和四六年に発足した囃子保存会では、会長がS氏に代わった昭和四九年から子どもを公募して、各山組で小中学生の子どもにシャギリを教えるようになるが、当時の募集は「男子」のみだった。しかし、この新たな募集に対して、女子からも参加を希望する声が出るようになり、いくつかの山組では参加が認められるようになっていった。

諫鼓山では、弟と一緒に「習いたい」といったR氏（昭和三五年生まれ）が昭和五〇年の春から練習に参加した。当時、シャギリを指導していたN氏（昭和二三年生まれ）は、「囃子だから（狂言ではないから）、女子でもいいのでは」と、受け入れたという。N氏は筆頭に相談して了承を得、負担人にも報告した。R氏は、高校生になると練習を辞めたので次の曳山祭に出ることはなかったが、夏の「長浜おどり」では男子に混じって笛を吹いた。数十人の子どものなかでただ一人の女子だった。それを見ていた人は、「女子でもいいのだ」と思ったかもしれないとN氏はいう。その後鳳凰山・壽山でも女子がシャギリの練習に参加するようになる。

同じ頃、囃子保存会も学校から祭りへの女子参加を迫られるようになる。子どもを囃子方として祭りに出すために休ませてほしいと保存会（S氏とT氏）が長浜市立西中学校へ依頼に行くと、一部の子ども（男子）

だけを休ませるわけにはいかないという意見が職員からあがっていると校長にいわれたのである。S氏は、この意見を總當番に相談し、シャギリへの女子の参加の方法が図られる。結局、「シャギリは祭りそのものではない」との見解によって、夕渡りの先導隊のシャギリに女子参加が実現することになる。昭和五四年のことである。總當番がわざわざ「本隊とは別の先導隊」と説明したという。昭和五六年と推定できる新聞記事には「最近では女子生徒三〇人が加わり」とあるので、この頃、複数の山組にわたり三〇人も女子がシャギリの練習を始めていたのである。

実は、現在は女子にはシャギリを教えない萬歳樓でも昭和五五年から三年間は、祭りには出ないことを条件にして女子も練習に参加させていた。しかし、祭りになると「せつかく練習したし、やっぱり出たい」という子どもの親から苦情が出て、問題となり、それ以降は女子の練習参加がなくなったのである。

#### (2) 祭りのシャギリ参加へ

祭りの出番のシャギリに女子が参加するようになるのは、昭和五七年の鳳凰山（祝町）からである。八人の女子が後山で囃した。「祝町はオーブンな気質なので、女子をそろそろ使おう」という機運になったそうだが、町内でシャギリをできる男子が一人しかいなかったため、「よそから（囃子方を）借りるくらいなら」と女子を出すことに踏み切ったという背景もある。翁山でも昭和五〇年代は男子の数が減っていた時期であり、祭典費を全戸から徴収しているので、女子は出られないというのは「かわいそう」とシャギリに参加させたという。ただ、女子はあくまでシャギリへの参加が認められたのであって、亭に登って笛

を吹くことはできない。狸丸も事前に曳山には登れないことを了承させたうえで昭和五〇年代にシャギリへ女子を参加させるようになった。

女子のシャギリへの参加は、評価する人がいる一方で非難する人も多く、S氏たち保存会は調整に苦労したという。それでもせっかく入った女子の演奏機会を増やしたいと考え、各方面に働きかけ、裸参りの迎えシャギリや祭り以外の夕渡りのパレードなどでも囃子保存会として演奏するようにした。今では認知度も上がり、イベントで各地に呼ばれるようになっていく。

### ①-2 シャギリの現状

#### (1) 女子がシャギリをする山組

現在は、萬歳樓と月宮殿を除いた一〇の山組のシャギリに女子（幼稚園女兒から小学生女兒、女子中学生くらいまで）が参加しており、祭りのすべての日程にわたって笛を吹いている。ただし、女子が亭に上がって演奏したり、本日（ほんび）の八幡宮での奉納狂言において出笛や切り笛を独奏したりすることは少ない。

商店街や自町での狂言では、女子が独奏することもあり、曳山のまわりでにぎやかに笛を吹くことによって、華やかな祭りの演出を担っている。また、祭りの最終日に長浜文化芸術会館でおこなわれる観劇会では、出笛を女子が担当することも多い。

女子の練習熱心さや覚えの早さは、どの山組でも語られる。練習では、笛だけでなく、太鼓やすり鉦を女子が担当することもある。諫鼓山の練習では、女子中学生が、太鼓やすり鉦を担当し、春日山では女子小学生が太鼓を叩いていた。

女子が曳山に登って亭で演奏できないことに対しては、山組の人々の多くが「かわいそう」と発言し、女子を曳山に登らせることを『よそがやれば、うちもやる』と、みんな思っている。」という意見もある。しかし、「伝統」であるからそれは考えられないという人も多い。

囃子方をする女子は、兄弟や同じ仲間である男子が亭に上がるとき、必ず「いいな」とうらやましげな声をあげる。しかし、「どうしても登りたいわけではない」ともいう。「男の子の祭り」であることは、家でも町内でもさらには学校（長浜市立西中学校などでは郷土授業で取りあげる）でも習っているのに、納得できているという。

#### (2) 女子がシャギリをしない山組

女子をシャギリに参加させていない月宮殿では、その理由を「（祭りに女性を参加させない）伝統」という。たとえ習っても保存会の曲と異なるため、ほかの山組の応援に行ったり、公演に出たりできないので、『山（曳山）に上がれない』女子がいても活かせる場がない」ことも理由となっているようだ。同じく男子のみの萬歳樓は、現在は男子が充分にいるが、それでも数は減ってきているので、「女子の加入もぼちぼち考えないといけない。」という。どちらの山組も女子は男子よりも笛が上手だと認めているが、女子が曳山に上がれない前提があるので、それでも加えるほどの理由が現在はまだない、と説明する。これらの山組の女子は、ほかの山組でシャギリをする。

### ①-3 シャギリの周辺

#### (1) 起し太鼓に芸者の三味線

昔は起し太鼓に芸者が三味線を入れてくれていたという。遊郭のあった昭和四〇、五〇年代までは、置屋のある町やそれを利用している町が、

お酒を持っていつて「おばちゃん頼むわ」と依頼したり、日頃のお札にと芸者が来てくれたりしていたという。祭りとは直接は関係のない「内輪の遊び」であるという。

起し太鼓は、「桜囃子」・「菊囃子」、など山組でそれぞれに違い、高砂山の「起し太鼓（正調）」のように三味線を入れられない曲もある。

現在の起し太鼓でも女性は参加しており、鳳凰山や常磐山のように高校生以上の女性が囃子方にいる山組では起し太鼓にも加わっていた。

## ② 狂言と女性

### ②-1 役者と女性

狂言（子ども歌舞伎）は、「山の芸」であり、神事に関わる儀式であるため女性は関与するべきではない、と山組の人々はいう。

狂言の主役である役者の子どもたちは、役を受けたときから「山の子ども」になるので、月宮殿や壽山などは役者の親を稽古場に入れないという。基本的には送り迎えも山組の役割であるため、母親が狂言に関わる場面は公式にはない。

ただ、例外は接待や賄いである。三役や若衆などに食事を振舞う「役者親接待」では、料理を作ったり、仕出し料理を給仕したりするのは役者の母親である。月宮殿は田町会館でおこない、その際に役者の母親たちは姉妹を連れてスーツの上にエプロンをして参加している。練習場に差し入れを持ってくる母親の姿も見られた。

また、稽古場における人員として女性に加わることにはある。翁山や春日山のようにお茶くみもすべて若い衆がするという一方、詰番は女性でも構わないという山組もある。青海山は、稽古毎に担当を決め、

それを会所に掲示しているが、女性にも詰番は振り分けられている。しかし、詰番はお茶を用意するだけで、練習を見ることはなく、すぐに稽古場を出ていく。諫鼓山では、詰番の担当者に用事があれば、妻や祖母がかわることも可能である。

### ②-2 賄い

祭りのなかで飲食の準備には、女性の姿が見られる。とくに裸参りで町内に戻ってきたときの接待の賄いは多くの山組で女性たちが参加する。萬歳樓では、役者親が合同で飲食の場を設営し、食事を母親たちが用意する。翁山・常磐山でも役者の母親や祭り関係者の妻たちが飲食物を用意する。

平成二三年は、諫鼓山では役者の母親など約一〇人の女性によって料理店の仕出しと手作りのとん汁が用意された。春日山では「裸参り賄い担当」に中老二人が振り分けられていたが、七人の女性たちがうどんやウインナー・おにぎりなどを作り、給仕していた。

また孔雀山は少人数の山組のため、祭りの役割の賄方担当に婦人会が関わる。しかし、常磐山では祭りの役割としての賄方には女性は関わらない。本来、祭りはすべて男性の手でおこなうべきだが、「できなくなったところが女の手に回っている。」のだという。

### ②-3 狂言の周辺の女性

#### (1) 振付の女性

平成二三年の月宮殿の振付は女性の岩井小紫氏であった。振付の女性は、多くはないが過去にもいる。岩井氏は前年にも翁山に依頼されており、平成九年には大谷白菊氏が狸々丸、昭和六一年には柳原照子氏が常磐山を担当している。

しかし、岩井氏は夫（中村福太郎氏）のあとを引き継いだといい、大谷白菊氏も市川升十郎氏から代理に頼まれたというので、山組が積極的に女性を振付に選ぶのではなく、「女性でも構わない」ということのようにである。

ただし、過去には女性の振付に対して、否定的な意見があったのかも知れない。よその山組の話として噂がされていた。

「女の振付さんのときに何か事故があつて、やっぱりいかな、という話になつたらしい。噂の類だけれど。（青海山での聞き取り）」

## (2) 顔師などの女性

顔師や鬘屋は、多くが女性である。山組は、予算を考慮して衣装屋を選択しており、衣装屋からの依頼によつて顔師、鬘屋のチームを作っているという。

平成二三年は、春日山では、衣装が男性、顔師と鬘屋は女性であった。月宮殿では、鬘屋が男性、衣装二人と顔師が女性である。春日山と月宮殿、諫鼓山は衣装を埼玉の衣装屋に依頼している。そこが顔師を京都の専門家、鬘屋を京都の鬘屋で手配した。青海山は、愛知県のK衣装店に依頼し、衣装・顔・鬘三人全てが女性であった。K衣装店は、もと市川少女歌舞伎（愛知県豊川市）の役者たちであり、三人ともがどの担当もこなせ、チームで仕事をしていた。

春日山では、顔師と鬘屋が女性のため、彼女たちが曳山に上がることはなく、鬘を着けるなどの直前の準備も外に床机を置いておこなわれた。しかし、狂言の途中で役者の顔や鬘の直しが必要になると、幕の内側に入って曳山に触れる形で作業することになり、それが問題とされることはなかった。

## (3) 観客としての女性

とくに山組の町内に住む年配の女性たちは、祭りを楽しみにしており、狂言を毎年見ているので、「目の肥えた」観客である。口ごもつたような役者には「口跡が悪い（歌舞伎の用語）」と批評したり、「配役が良かった」、どこの子が「うまかった」といい合ったりする。祭りが始まると、狂言の出来の噂が流れ、その評判によつて後宴の日に見に来る客の多さが変わるといふ。

## ③ 山と女性

### ③-1 山と舞台への女性の禁忌

山組の人々は祭りや狂言への女性の関与は、認められないといい、それらは具体的な場所への立ち入りや物への接触の禁忌として表現される。

まず、長濱八幡宮の本殿へは、祭りの構成員ではないので曳山祭の行事で入ることはできない。そして各山組の曳山は、登ることはもちろん、触つてもいけない、付属物を跨いでもいけない、とされる。これらは、どの山組でも共通である。

そして祭りの行事中に作られる行列も同様に女性は立ち入ってはいけない。夕渡り・朝渡りの行列のなかに女性が入り込むことは許されないう。

しかし、各会館に設えられた練習用の舞台をも曳山の舞台の延長と考えるかどうかは山組によつてそれぞれ解釈が異なってくる。たとえば、春日山では、練習用の舞台が設置された春日会館の二階へ女性が立ち入ることすら忌避されるが、他の山組ではそのようなことはない。青

海山では、「線香番対策」として、女性を含む調査者に舞台近くに座るよう振付が依頼し、それが問題となることもなかった。月宮殿の平成二三年の振付は女性であり、稽古舞台には上がって指導していた。諫鼓山でも女性の踊りの先生が稽古舞台には上がって指導をしている。先生が舞台への立ち入りを尋ねると、振付は「いいよー。稽古場やから。山車（曳山）はあかんけど。」と答えたように、稽古舞台は曳山の舞台とは異なると考えられたのである。

同様に祭り以外の場面での建造物としての曳山への接触についても山組によって異なる対応をしている。博物館に曳山を展示する際の際にも常磐山では女性には触らせない、という一方で狸々丸では女性も手伝うという。

そして、禁忌は絶対的なものではない。たとえば、祭りの途中で幟のチチの縫い付け部分が破れたときに繕いを依頼されていたのは女性であった。ほかにも曳山にかける幕類や山曳きハッピーの繕いなどにも女性関わっている。

さらには、過去には町内での山曳きに女性を加えた山組があったという。その女性が怪我をしたのでそれ以降はなくなつたという説明として話されるのではあるが、山曳きは女性への禁忌が変化する可能性がある部分といえる。

### ③-2 女性の禁忌と噂

祭りのなかで女性の禁忌は山組の人々に意識され、注意が払われている。

平成二三年の祭り中には、月宮殿の撮影カメラマン中の女性スタッフが曳山に触れてしまったようで、それが問題となっている。負担人た

ちが、カメラマン一行を叱責している。

このように人々が意識している分、それを破った話はこちらで噂される。とくによその山組の批判として噂されるようである。平成二三年の夕渡りのなかを女性が歩いていたことを別の山組の人々が「あれはあかんやろ」と、話している。夕渡りの列のなかに女性が入ることは、常に大きな問題になるようで、過去の山組の記録にもわざわざ記されている。また、事実がないにもかかわらず山組への中傷としてそのように噂が流れる、ともいう。

### ④ 曳山祭と女性

現在、曳山祭において曳山を囃すシャギリの部分に女性は参加している。昭和五〇年代に女子がシャギリに参加するようになったのは、祭りのなかで大きな変化であるが、その要因はいくつか考えられる。

まず、自町や町の外から呼んできた大人たちが演奏していたシャギリを自町の男子が担うという変化が前提にあり、その上で子ども数の減少によって男子だけでは足りないので、「よそから借りるくらいなら」と女子の参加が実現しているのである。また、「男女同権」が学校側から求められるという後押しもあった。そして、祭りを近くで見聞きしてきた女子たちの自分たちも参加したいという気持ちや親、山組の人たちの気持ちが重なつたといえる。

ところで曳山祭では、曳山とそこで演じられる狂言が祭りの主役であると考えられており、シャギリにはそれほど重きが置かれてこなかった。大正期から昭和初期には、近隣の村落の人々に演奏を依頼しており、今も「しゃぎりは、ほっとけ」という年配の人はいるという。シャギリは、

そのような祭りの周辺部にあるため、女性の参加が比較的容易にかなったといえる。

そのように始まったシャギリへの女子参加であったが、その演奏機会を広げてやりたいという保存会の働きかけによって、祭りを離れて芸能としてのシャギリの演奏機会が増え、またそれが曳山祭を広く知らしめる効果を上げているといえる。さらに現在では、八幡宮から御旅所までの道中をにぎやかに囃す女子のシャギリ方は祭りの要素としてなくてはならないものとなっており、多くの観光客が彼女たちにカメラを向け、観光面では主役の一つと目されている。

しかし、祭りにおけるシャギリは亭で囃すのがその本来の姿と考えられており、その意味では祭りそのものへ女性が参加しているとはいえない。実際に祭りの中心である八幡宮での奉納狂言では、亭と曳山の下では意思疎通が図れないことが多く、その場合は下の女子たちは演奏をやめ、亭だけで粛々と演奏を進めていくことになった。

このように女子・女性の参加は、あくまでも祭りの周辺であり、現在は祭りの中心部分に女性が関わることはない。

「山に関して、女子は関われぬ。男女平等のなかでおかしいかもしれないけど、祭りの伝統文化は守っていきたい。(諫鼓山での聞き取り)」「女性は山に関することはアウト。(常磐山での聞き取り)」

山組の人々は、このように語る。

では、実際に女性を排除する「山に関すること」とは何を指すのだろうか。それを考えることによって、現在人々が何を譲れない祭りの「神事」・「伝統」と考えているのかを見ることができるといえる。

まず、シャギリは女子が参画し得たように祭りの周辺である。同様に

賄いは祭りに必要ではあるが、やはり周辺の事柄であり、女性に任されている部分である。つぎに狂言については、役者自身に対する女性の禁忌はない。足を地面に着かせないよう気をつけるようには、女性の接触を気にすることはなかった。また、狂言に関わる実務的な女性たちが排除されることはない。しかし、夕渡りなどの行列は、行事の一つであり、女性は入ってはいけない。そして、曳山やその舞台には、女性が登るのも触るのも忌避され、その禁忌が稽古舞台にまでも及ぶこともある。それらをどこに線を引くかは山組によって振れており、各山組の現在の意識が反映している。

しかし、曳山祭においては奉納狂言に関わる行事と曳山、舞台への女性の忌避が言及されており、大切にされる「神事」やそれを守る「伝統」は、「狂言をおこなう舞台のある曳山」に集約されているといえることができる。

1 新聞名、掲載年月日、不詳。曳山博物館蔵新聞切り抜きより

2 近江毎夕新聞 (昭和五七年四月二二日)

3 近江毎夕新聞 (昭和五七年四月二二日)

山組	練習参加者中の女子 (※)	平成 23 年の練習参与時のようす
翁山	17 人中 7 人	平成 23 年 2 月 12 日 (土)、指導者は男性 3 人、練習参加者は男子 6 人・女子 5 人。
春日山	10 人中 5 人	平成 23 年 2 月 5 日 (土)、指導者は男性 2 人、参加者は男子 5 人 (小学生)・女子 4 人 (小学生から中学生)。
諫鼓山	10 人中 6 人	平成 23 年 1 月 23 日 (日)、指導者は男性 4 人、参加者は男子 1 人 (小学生)・女子 4 人 (小学生 2 人・中学生 2 人)。
孔雀山	15 人中 3 人	平成 23 年 3 月 9 日 (水)、指導者 8 人、参加者は小学生の男子 2 人・女子 1 人。
月宮殿	46 人中 0 人 (女子参加なし)	平成 23 年 2 月 12 日 (土)、指導者は男性 2 人、参加者は男子 5 人 (小学生から高 3)。
壽山	15 人中 10 人	平成 23 年 3 月 6 日 (日)、指導者は男性 4 人、参加者は男子 2 人 (小学生)・女子 1 人 (小学生)。 平成 23 年 3 月 20 日 (日)、指導者は男性 4 人と女性 1 人 (常磐山)、参加者は男子 2 人。
猩々丸	11 人中 7 人	平成 23 年 2 月 12 日 (土)、指導者は男性 6 人、参加者は小学生の男子 2 人・女子 6 人。
青海山	21 人中 11 人	平成 23 年 2 月 13 日 (日)、指導者は男性 10 人、参加者は子ども男子 6 人・女子 3 人。
高砂山	16 人中 8 人	平成 23 年 3 月 12 日 (土)、指導者は男性 3 人。参加者は上級組に男子 3 人 (小学生)・女子 1 人 (中学生?)、初級組に男子 6 人 (小学生 3 人・幼稚園? 3 人)・女子 2 人 (小学生)。子どもに連れ添った父兄 (男性 1 人・女性 1 人)。
常磐山	27 人中 12 人	平成 23 年 2 月 19 日 (土)、指導者は男性 3 人・女性 1 人。参加者は男子 3 人・女子 6 人。 平成 23 年 3 月 5 日 (土)、指導者は男性 2 人・女性 1 人。参加者は男子 7 人・女子 3 人。
萬歳樓	12 人中 0 人 (女子参加なし)	平成 23 年 3 月 5 日 (土)、指導者は男性 5 人、参加者は男子 6 人 (小学生)。 平成 23 年 4 月 2 日 (土)、指導者は男性 8 人、参加者は男子 5 人。
鳳凰山	21 人中 14 人	平成 23 年 2 月 19 日 (土)、指導者は男性 2 人・女性 1 人 (常磐山)、参加者は小学生から中学生の男子 7 人・女子 5 人。

現在のシャギリ練習参加の男女比

※保存会がおこなったアンケートによる